

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

「たくみな」という言葉があります。「たくみ」というのはよい言葉なのです。たとえば、三省堂の大辞林(第二版)を引くと、最初にてでくるのは、「飛驒ひだの匠たみ」というように注1 名匠めいしょうという意味です。それから、「美しいものをつくりだすわざ」あるいは「考えをめぐらして見つけた方法、工夫くふう」というような意味をもつのが「たくみ」です。「手際てぎわよくすぐれているさま」を言う言葉です。

① 手を用いてすぐれている。上手で見事なのが「たくみ」です。

そのよい言葉である「たくみ」が、「手」でなく、「言葉」とむすびつくと、一転、よくない言葉になってしまいます。人が人をだます事件があるとき、きまつて使われる②「言葉たくみに」という表現があります。言葉たくみにおびきだす、さそいだす、売りつける、だます。③口がうまいから、言葉でならどうとでも言えるまで。言葉ということでは、「たくみ」はよくないのです。なぜ、言葉については「たくみ」であることが信じられないか。

言葉というのは、本来は、もつともコミュニケーションの注2 かなめをなすべきものだったはずです。④、言葉に対して、わたしたちの社会は、むしろ言葉というのは信じるに⑤ 外ならないという方向を向いてきて、言葉を上手に使うという態度を育てるという方向には向かわなかった。言葉を簡単に信じないというのは、信じていい一つの態度です。健全な注3 懐疑かいぎてき的な精神は⑥ そうした態度なしに深められません。

しかし、言葉を信じないということとをさんさんにやってきた結果、言葉を上手に使うということとを、しないのでなく、できなくなってしまうのではないか。少しのボキャブラリーしかもたなくなってきた、かわいい、むかつく、すげえ、うざい、といったように、わずかな言葉だけで⑦ セイいっばい自分を表し、伝えるというふうになっています。

社会は豊かになったが、⑧ 言葉はむしろ貧しくなった。言葉の貧しさを生むもの、そして言葉の貧しさが生むものは、必要な他者の欠落です。わたしたちのボキャブラリーには、自分という言葉はあっても、他分という言葉がない。あるのは、他人という、自分とは切れている存在を表す言葉です。反対に、自分とおなじである他人を表す言葉が、友だちであり、仲間です。他人とは、

言葉が通じない。友だちとは、言葉なんか必要としない。

⑨ そういうあり方から生まれているのが、今日の独白社会です。独白はモノログ、ひとり言のことです。豊かな社会、文明技術がわたしたちにもたらしたのは、「ひとりである」というあり方です。わたしたちの社会は、「ひとりである」というあり方をほとんど日常につくりだしてきた社会です。いっしょにそこにおいても、「ひとりである」。高齡化^{こうれいか}。少子化。引きこもり、オタク。ホームレス。独身。離別^{りべつ}。いずれも「ひとりである」社会の表情です。

「なじみ」「いつもの」がなくなった街。⑩ 言葉が人と人をつながなくなっている例が、コンビニやファーストフードをはじめとする店のあり方。そして、メールやネットです。メールやネットがもたらしたのは、独白のコミュニケーションです。

独白の言葉はいわば一方通行の言葉。他の人にとっては向こうから一方的にやってくる言葉。コンビニで使われるマニュアルの言葉はそうした独白の言葉の一種です。

しかし言葉というのは、表された言葉と表せない言葉でできています。そして、表せない言葉に大きく深い意味がある。「注4 万感^{ばんかん}胸にせまる」。「注5 無用の用」。あるいは、あいさつの言葉には、「どちらまで」「そこまで」というような、何の役にも立たないけれども、大切な言葉があります。

注6 空談、清談、閑談^{かんだん}を楽しむ⑪ ノウリヨク。必要な他者をつくりだしてきたのは、そうした言葉によって伝えられてきた心の持ちようだったはずです。

むかし「独白」にたいして、「複白」の必要ということが⑫ 下^{した}かれたことがあります。「独白」がモノログなら、「複白」はダイアログのこと。「複白」というのはいい言葉だと思う。今日もつとも⑬ カイフク^{かいふく}されなければならないのは「複白」という相手のあるコミュニケーションではないでしょうか。たずねられなければならないのは、言葉を信じられるものにするという言葉のあり方です。

『なつかしい時間』長田弘

注1 名匠・・・工芸などにすぐれたうでまえを持つ人。

注2 かなめ・・・物事の一番大事なところ。

注3 懐疑的・・・なんとなく疑わしい気持ちをしている。

注4 万感胸にせまる・・・様々な思いが、おさえ切れないほどこみ上げてくる。

注5 無用の用・・・役に立たないように見えるものが、かえって大切な役割を果たしているということ。

注6 空談、清談、閑談・・・むだ話、上品な話、気楽な話。

問一

部①・④に当てはまる最も適当な言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア こうして イ ところで ウ だから エ すなわち オ ところが

問二

部②「言葉たくみに」という表現「はどんなときに使われるか。解答らんに合うように文中から七字でぬき出しなさい。
(句読点は字数に入れます。)

問三

部③「口がうまい」のように「口」を使った次の言葉の意味をそれぞれ後から選び、記号で答えなさい。

- 1 口がすべる 2 口がかたい 3 口を出す

ア 不満な気持ちを顔に出す。 イ 言うてはいけないことを軽々しく言わない。

ウ 言うてはいけないことをうっかり言うてしまう。 エ とてもおしゃべりである。

オ 多くの人の中で最初に発言する。 カ 人の話に割りこんで意見を言う。

問四

部⑤・⑦・⑪・⑫・⑬のカタカナを漢字に直しなさい。

問五

部⑥「そうした態度」とはどのような態度か。解答らんに合うように文中から十字以内でぬき出しなさい。
(句読点は字数に入れます。)

問六

部⑧「言葉はむしろ貧しくなった」とあるが、具体的に説明している一文をぬき出し、最初の五字を答えなさい。

問七 — 部⑨「そういうあり方」とはどのような状態のことか。それを説明した次の文の 部 A・B に当てはまる言葉を、それぞれ指定した字数で文中からぬき出しなさい。(句読点は字数に入れません。)

A 六字 と B 八字 とがある状態。

問八 — 部⑩「言葉が人と人をつながなくなっている例が、コンビニやファーストフードをはじめとする店のあり方」とあるが、「コンビニやファーストフードをはじめとする店」で使われる言葉が「人と人をつながなくなっている」と筆者が考えるのはなぜか。文中の言葉を使って、六十字程度で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問九 次のなかで本文の内容に**合わないもの**を一つ選び、記号で答えなさい。

- ア わたしたちの社会は言葉というものを信じるにたらないものとし、言葉を上手に使うという態度を育ててこなかった。
- イ 社会は豊かになったが、他人とは言葉が通じないし、友だちとは言葉が必要とせず、ますます言葉は貧しくなっていた。
- ウ 今日の豊かな社会がもたらしたものは「ひとりである」社会で、コミュニケーションのあり方も一方通行の言葉である。
- エ 言葉とは本来コミュニケーションのかなめをなすべきもので、言葉を簡単に信じないという態度は改めなければならない。
- オ 今まで必要な他者を作り出してきたのは、一見むだに思えるような言葉によって伝えられてきた心の持ちようである。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

〔高田寺北口商店街にある「江州屋乾物店」の一人息子である正一は、中学生ながら家業を手伝う毎日である。〕

台所から細く水道の流れる音がする。茶碗のこすれ合う、カシャカシャという音もする。母親は朝食の①ジュンビをしているらしかつた。音を立てないように気を使っているところを見ると、台所に続く茶の間では父親がまだ眠っているらしい。

今だ。下腹にぐいと力を入れて、正一は土間から店に回った。雨戸を閉め切った店は暗く、照りつける八月の朝日の熱に蒸されてむうつと暑い。額の汗をぬぐうと、正一は息をつめて身をかがめた。

中腰のまま、茶の間と店を隔てるガラス戸に影が映らないようにそろそろと帳場に近づく。音を立てないように注意して、帳場のいちばん下の引出しを開ける。引出しには小さな手提げ金庫が入っていてその中には店で使う釣り銭がしまっているのである。

金庫の蓋に左手を添え、右手でポッチを回すと、バネ仕掛けの蓋がひよいと開いた。一円玉、五円玉、十円玉がきちんと並んだ小銭の皿を持ち上げ、下からしわくちやの五百円札を一枚引き抜く。引き抜いた札をすばやく尻のポケットに押し込み、金庫を戻して引出しを閉める。それがすむと、正一はさらに小さく身をかがめてガラス戸の前をすり抜け、土間に戻った。

茶碗のこすれる音は止んだが、台所からはまだ水道の流れる音が聞こえる。母親が味噌汁の味噌を溶きはじめたらしく、音に混じってふんといいにおいが漂ってくる。茶の間はしんと静まり返ったままで、父親の起きた②ケハイはない。

腰を伸ばすと、正一は半分開けておいた土間の戸から江州屋乾物店の裏庭にすべり出た。煮干しやかっお節の空き箱がごたごたと③ツみ重なった脇を、五、六歩歩いて離れにたどり着き、雨戸の後ろに隠してあつた運動靴とスポーツバックをひつつかんだ。

あとはもう、垣根の破れ目から走り出すだけである。サンダルを脱ぎ捨て、運動靴に足を突っ込んだ。紐を結ぶ暇はない。かかとを踏んづけ、紐が泥まみれになるのも構わず正一は垣根に近づいた。破れ目にまずスポーツバックを押し込み、それから地面に手をつけて頭から突進する。肩を左右に揺すぶってどうやら上半身に向こう側へ運び終えると、こんどは尻だ。はいつくばったままひと休みして、さて尻にかかろうとしたとたん、④スポンのベルトから正一の腰がぐつと宙に浮いた。

「あ」

と思う間もなく、下半身がすごい力で引っぱられる。ベルトが腹に食い込んで、息がつまる。ケンケンと咳が出そうになる。「何くそ」と必死で力んでも、垣根を境に上半身と下半身が生き別れになっては力の入れようもなく、正一ははずると引き戻された。へたつたままの正一の目の前に、庭下駄に載った父親の足が踏ん張っている。

あきらめて、正一は立ち上がった。

「馬鹿野郎！」

父親の怒鳴り声といっしょに拳が飛んで頬にはじけた。思わず頬を押さえた正一の腕を、父親の大きな手がわしづかみにする。

「馬鹿野郎！」

こんどは押し殺したような声でそう言うと、浴衣の寝巻をはだけた父親は有無を言わず正一を茶の間に引っぱって行こうとする。

こうなったらもうどうすることもできない。正一は残った⑤シンシンをかき集めて父親の手を振りほどき、⑥ふてくされた顔で先に立って茶の間に上がった。茶の間では、母親が正一に負けないくらいふてくされた顔つきでちやぶ台の前に座っていた。

「どこへ行くこうとしていたんだ」

あぐらをかいた父親が大声を上げた。

「泥棒猫みたいな⑦カツコウをしやがって、どこへ行くつもりだったんだ」

かみつきそうに怒鳴る父親の息が酒臭い。正一は酒のおいひを払いのけるように頭をそびやかすと、父親のはだけた胸に⑧視線を据えた。

「野球」

「野球の練習試合」

「練習試合に行くのに、何であんなところから出ていかなきゃならんだ」

「……」

「何でだ。答えろ！」

答えると言われても、帳場のカネをくすねたからなどと、真正直に答えられるわけではない。朝飯も食わず、弁当も持たずに出かけるのであれば、飯代の五百円ぐらい持ち出してもびくつくことはない、正一はなおも父親のはだけた胸をにらみつけた。

「……おかあさんがいやがるから」

ぶすつと言うと、母親は「当たり前でしょ」と言わんばかりに口をとがらせる。

「野球、野球って、あんたもう中学二年なのよ。三年の夏休みよ。一学期にあんな通信簿はもらってきて。高校受験はどうするつもりなの」

「……」

「高校へ行かないつもりならこつちだつて考えがあるけど、あんたこのごろ店の手伝いもろくすっぽしないじゃないの。中学三年にもなつて野球ばかりで」

「……」

「黙だまつてないで何とか言いなさい！」

母親のかん高い声が飛んできた。思わず尻を浮かせて、

「オレは……」

と言いかけるが、^⑨そのあとが言えない。続かない。正一は浮かせた尻たたみを畳たたみに戻してうつむいた。

「あんたつて子は、いつだつてこうなんだから」

母親がまたぶつぶつ言い始める。^⑩いつものとおりだ。今年になってから、母親は正一が野球に行こうとするといつもイヤな顔をする。イヤな顔をするばかりでなく、高校はどうするつもりだよいのやいのと責め立てる。

脳溢のういつつ血で倒れたばあさんが入院しているあいだこそ忘れていたようだったが、ばあさんが死に、葬式そうしきを済ませて落ち着いてからは、以前に輪をかけてますますうるさく正一を責め立てるようになった。

一学期の成績を持ち出し、正一のクラスメイトのだれその受験勉強ぶりを持ち出し、父兄会で聞かされた「もう少しがんばらないと普通高校はちよつと」という担任の教師の言葉を持ち出し、あれやこれやを持ち出しては正一を責め立てていると、どうやら自分の方がカッとしてくるらしく、必ず今みたいに声が上がずってかん高くなる。

その母親らしくないかん高い声を聞いていると、正一はもう何も言えなくなるのだった。

そんな声を出すのは正一の野球のせいばかりではなく、ばあさんがいなくなった分まで働かなくてはならない疲れや、毎晩のようによいづぶれて帰ってくる父親に対するいらだちが重なっているからである。それがわかっているから、正一は何も言えない。言えないままに野球への思いだけはふくらんでいき、その思いのやり場にどうしようもなくなって、近ごろ正一は無口になった。「オレ、行く。行かないとみんなに迷惑がかかる」

うつむいたまま低い声で言うと、

「勝手にしなさい」

母親がぷいと立ち上がった。

「あたしはもう知らないから。好きにしたらいいでしょ」

ああ、好きにするよ。と正一は心のなかで怒鳴った。父親には、オレを殴るヒマがあつたらかつお節を削れよと言ってやりたい。母親には、おやじには何も言わなくせにオレに八つ当たりするなと言いたい。オレは、オレは：オレはプロ野球選手になりたい。正一は顔を上げた。こつちを見ている父親と目が合った。あわてて目を伏せると、

「正一」

父親が意外に静かな声で言った。

「行ってこい。話の続きは今晚だ」

注 帳場・・・旅館や商店などで、会計をする所。

〔高円寺純情商店街 本日開店〕ねじめ正一

問一 — 部①・②・③・⑤・⑦のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 — 部④「ズボンのベルトから正一の腰がぐつと宙に浮いた」とあるが、なぜか。十二字以内で書きなさい。
(句読点は字数に入れません。)

問三 — 部⑥「ふてくされた顔で先に立って茶の間に入った」とあるが、この時の正一の気持ちの説明として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 父親は自分のことを思っただ怒ってくれているのがよく分かるので、今すぐにでもきちんとあやまりたいと思っっている。

イ 勉強もせずに店のお金までも取ってしまうでしょうもない自分を、父親がきちんとしかつてくれてほっとしている。

ウ もはや野球の練習試合に行けるはずもないし、父親は自分の思いを絶対に聞かないだろうなどと悲しくなっている。

エ 普段から自分の思っていることを特に理解しようともせずに、いつも一方的で強引な父親のやり方に反発している。

オ 母親に野球の練習試合のことは言っているので、おそらく父親にはきちんと説明してくれるだろうと期待している。

問四 — 部⑧「視線を据^すえた」とほぼ同じ意味の言葉を文中から六字でぬき出しなさい。(句読点・記号は字数に入れません。)

問五 — 部⑨「そのあとが言えない。続かない。」とあるが、この時の正一の気持ちを説明した次の文の [] 部に当てはまる言葉を、それぞれ指定した字数で文中からぬき出しなさい。(句読点は字数に入れません。)

オレは、本当は [A (七字)] なりたいのだが、母親らしくないかん高い声を聞いていると、何も言えなくなる。

母親がそんな声を出すのは [B (八字)] ばかりでなく、 [C (二十六字)] であったり、 [D (二十七字)] が重なっているからだということもわかるから、何も言えなくなるのだ。

問六 — 部⑩「いつものとおりだ」とあるが、だれのどのような態度を指すか。文中の言葉を使って、解答らんにあうように十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問七 次の中から、本文の内容に**合わないもの**を一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 正一は野球の練習試合に行きたかったので、店の金庫から飯代の五百円札を持ち出した。
- イ 正一は両親の目をぬすんで、野球の練習試合に行くために裏庭から出ていこうとした。
- ウ 父親は正一が野球ばかりして店の手伝いをしないことに腹を立てて、一方的にしかりつけた。
- エ 母親は正一が野球ばかりに力を入れて、高校受験の勉強をしないこととうんざりしていた。
- オ 父親は正一と母親のやり取りを聞いて、思いがけず野球の練習試合に行くことを認めた。